

金屋町通信

発行元：
金屋町まちづくり協議会
発行責任者：般若陽子
編集責任者：般若慎一郎

金屋町開町400年
記念特大号

上の写真は金屋緑地公園内の車椅子用スロープの手摺です。鋳物製の透かし彫りのようなレリーフが取り付けられていますが、よく見るとこれも弥栄節の踊りです。

さて懸案の開町400年記念イベントが挙行されました。2年前から頭を悩まし、準備してきた大事業を成し遂げ、自治会役員もまちづくり協議会役員もほっとしているところではないでしょうか。ところで肝心な時に、編集責任者は事情があつて病院にいました。そこで今回の記事の殆どを般若陽子さんと棚田義宏さんに執筆していただきました。ご両名に感謝申し上げます。

300名が参加して

開町400年記念フォーラムを開催

9月11日(日)、金屋町まちづくり協議会が市との協働事業として、ウィングウィング高岡4階大ホールで約300人の来場者を集め「金屋町開町400年記念フォーラム」を開催した。

【基調講演】宮田亮平 東京芸術大学々長

テーマ 「夢を探そう」



ステージから降りて話す宮田学長

記憶に残った発言を以下に記してみます。

- ・金屋町の紹介DVDを見たとき、私は佐渡の生まれですが建物の構造がよく似ているので故郷に帰ったように感じた。
- ・発想を変えてみるためには、相手に視線を合わせる。また失敗したときは、めげないで視線(視点)を変えて見ることが大事です。
- ・学びはまねる(パクルのではなく、まねる)～赤ちゃんはお母さんの笑顔をまねることから始める。

など、色々な写真やDVDで事例を紹介しながらの講演でした。

【パネルディスカッション】

次世代に継ぐ

ものづくりとまちづくり

- コネクター 武山良三 富山大学教授
 パネラー 宮田亮平 東京芸術大学々長
 上野幸夫 富山国際職芸学院教授
 槻間秀人 金属工芸工房かんか代表
 加藤昌宏 金屋町自治会長

(討論の概要)

上野氏：建屋は100年で修復時期が来る。金屋町も必ず近い将来行わなければならないが、修景事業や空き家活性化事業を利用されれば良い。又 外に打って出て実際に作っている姿を見せることが子供たちや後

継者つくりには一番大切ではないでしょうか。

宮田氏：若者や女性が集う“金属工芸工房かんか”のようところが、あと2~3か所できれば競争になり活性化するのでは。又新しい血を入れる意味で、他の伝統工芸品との融合を図るため出かけたり、来てもらうことも考えてみてはどうか。



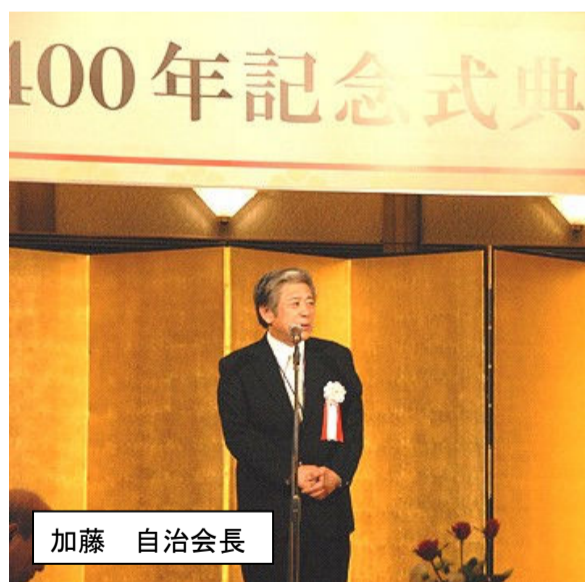
槻間氏：金屋町には受け入れる気持ちがあり、もらい湯の制度などで大変助かっているが、金工作家の作品の展示場所や大きな研修施設があれば更に良いと思っている。

加藤氏：御印祭は町民がまとまるための話合いのツールとなっている。又、金屋町の良いところをお話し出来るようになり、自分の町を愛し、人に来て頂けるように努力したい。

武山氏：普通の町がどんどん消えていく中で、金屋町の人達は日本の中で自分達の町が果たすべき役割とあって、海外に対してもこれぞ日本の町と誇れる普通の町にして頂きたい。

前田家当主も招いて

開町400年記念式典と祝賀会



加藤 自治会長

9月12日(月)、ホテルニューオータニ高岡において、招待客、住民、スタッフなど約150人が出席し、記念式典と祝賀会を開催した。

主な招待者：前田家18代当主 前田利祐・万里子御夫妻、石川県知事、高橋市長、橋衆議院議員、川村高岡商工会議所会頭など。

冒頭、加藤自治会長が「金屋

町の先人が苦勞して守り育ててきた文化や町並みを後世に残せるよう、今後も努力をしていきたい」と挨拶した。引続き、石井知事、橋衆議院議員、高橋市長、前田利祐様から祝辞を頂いた。このあと、金屋町に多大な功績のあった飛見丈繁氏(孫 達郎様)、竹平政太郎氏(孫 政男様)、新保昭一氏(子 公章様)の3人の故人に対して、遺族の方に加藤会長から感謝状と記念品を贈呈した。



前田利祐さん

川村高岡商工会議所会頭の音頭で乾杯し、祝宴が賑やかに催された。最後に元井實弥栄節後援会長の主唱で万歳三唱して閉会した。

記念講演

「金屋町と日本の未来」

富山大学芸術文化学部 伊東順二 教授

式典を前に、基調講演として富山大学の伊藤順二教授による「金屋町と日本の未来」と題した記念講演があった。要点は次の通りでした。

伝統工芸が生まれた町屋の町並みで、生活の中での美しさを再認識してもらうために、さまざまな作品を展示し「ゾーンミュージアム」をコンセプトにしたのが「金屋町楽市 in さ

まのこ」です。楽市を企画した理由の一つは、今でも盛んに政治家たちや文化人が口に出す「地方の再生」という上から目線の言葉に嫌悪感を持っていたため、再生しなければならないのは今回の震災の対応にも明らかのように「東京」とそのマンネリ化した意識構造だ、といつも思っていました。東京は地方文化の素晴らしい受信者であり、その国際的な発信者でなければならないはずなのに、地方に対する西洋文化の一方的な発信者になってしまい、いつの間にか文化の間違った囲い込みに加担してしまったのです。

金屋町楽市は失われていく景観と技術、産業を再生することで、地方の発信力を回復する、という試みです。そして、その発信を実現するために、空間と時間ごと東京に持ち込もうとするのが、東京の丸ビルで8月25日から31日まで開催した「金屋町楽市と隈研吾展」であり、これに続く今秋ローマで開催する「ラ・ルーチェ」展です。

金屋町楽市と隈研吾展

in 東京丸ビル1F

8月25日、東京駅前丸ビル1Fマルキューブ、天井が高く広いエントランスの約半分に高く積み上げられた三角形のポリゴニウムがひととき目を引く。その上に置か



れた種々のオリジナルな器たち。何だかとてもアートである。私が訪れた午後5時頃には展示した品物の約7割が売れたそうである。大都会のエネルギーを感じる。

7時から場所を変えて新東京ビルのカフェで、伊東順二教授と隈研吾氏とのトークショーがあった。伊東先生の軽妙な語り口と隈氏の朴訥としたあのあったかい口調が！たまらない。順ちゃん、クマさんと呼び合うお二人の親密さと信頼の深さが伝わってくる。金屋町の魅力について、隈氏は産業（金属工芸）が町を造る。まずその迫力に感動した。こんな町なら、何か面白いことが出来るのではないかと。

伊東教授は、産業が造った町がそのまま残っている。生活の姿が残っている。ものづくりと町が一体となっている。たった二日間だけだが町全

体をゾーンミュージアムにする可能性にワクワクした。ここには無限の可能性があると。そして地場産業である三協立山アルミの三角形のポリゴニウムの開発である。また三芝硝子の繊細さである。

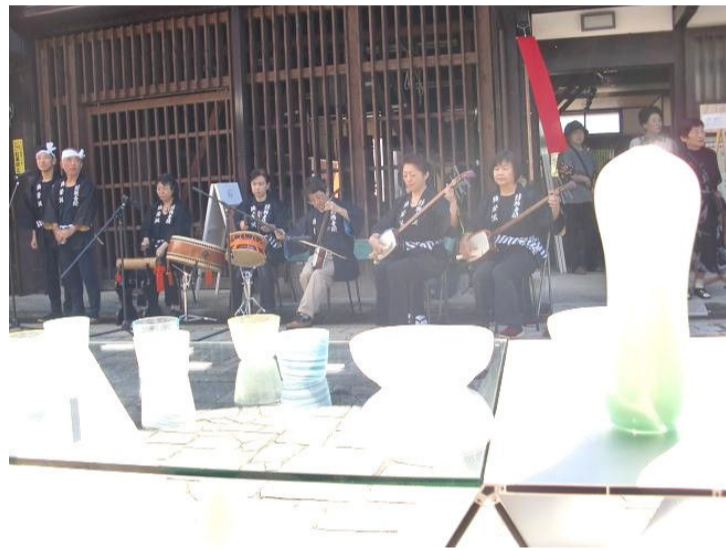
新製品開発に対する隈氏の卓越した感性が現場を動かし、新らしきを生み出す、その現場力を感じた。

そしてお二人が関係した国際的なビエンナーレの数々、そのオリジナリティが紹介された。今後も“用の美”つまり日本人の心の美を追求してゆきたいと結んだ。



第4回になった

金屋町楽市 in さまのこ



9月24～25日に、第4回になる「金屋町楽市 in さまのこ」が開催され、金屋町通りが賑わいました。今回は東京丸の内で開催し、金屋町を全国へ発信するなど、新たな試みがなされました。更に伊東実行委

員長は、この秋にイタリア・ローマの皇帝博物館で「ラ・ルーチェ」展を開催予定と言っています。

楽市のイベントに金屋町から何人かが東京へ出向いて参加してきましたが、この際イタリアまで行ってきますか？

今回は神妙寺で着物レンタルをするなどして、和服で散策する女性達が多くいて、今まで以上の華やかさを演出できたと思います。

⑬ 鋳物資料館のたたら板



鋳物資料館に、

金屋町開町400年記念
シリーズ
金屋町と高岡鋳物の歴史

明治時代に使われていたという古いたたら板がありますが、これはもともと般若清助家（現在の黒谷家）の工場で作られていたものです。7～8月に鋳物資料館で企画展「金屋町の歴史～鋳物のうた」を開催した折に佐野善雄先生から聞いた話と、飛見丈繁さんがまとめられた「高岡鋳物史話」の記述が結びついて分かった事ですが、実は当時横田小学校の教員だった佐野先生がたまたま般若清助家を訪問した時に、廊下に立てかけてあるたたら板を見つけ、子供達の教材として学校へ寄贈してもらえないかとお願いしたところ、昭和28年文化の日に横田小学校へ寄贈を受け、その後学校に展示してあったものが現在は鋳物資料館に展示されているということです。

金屋町開町400年記念展

弥栄節の女～飛見丈繁

期間：10月2日～30日

場所：高岡市鋳物資料館第3展示室

入場無料